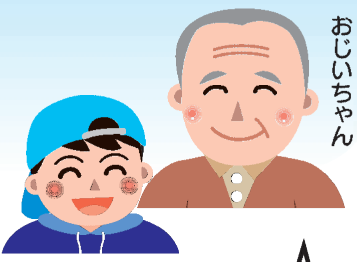
ども特集

かしの東村山ってどんなかんじだったの？

おじいちゃんやおばあちゃんが子どものころの東村山って、どんなかんじだったのかな？
そのころの食べものや民話から、「ちょっとなつかしい東村山」をそうぞうしてみてね！

おはなしおじいちゃんの東村山の民話大集合！


おはなしおじいちゃん
えーっ！でも楽しみ！

今日は、おじいちゃんが小さい頃に教えてもらった昔話をしてあげようね。怖い話もあるよ。

動くとりい

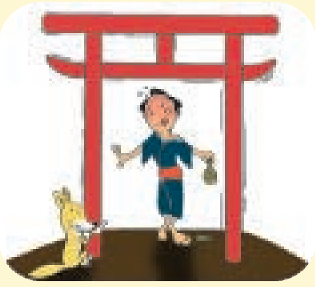
今の久米川町あたりであった話です。江戸の終わりごろ、正さんというおりものの糸を染める職人がいました。

ある日お祝いごとがあり、つい飲みすぎた正さんが、よろめく足どりで家に帰ろうとしていたときのことです。

あまりに足がふらつくので、林の中にある赤いとりいにつかまろうとそばまで行くと、ふしぎなことに、とりいは動いて先の方に行ってしまいます。近づいてまたつかまろうとすると、とりいはまたまたスーッと先の方に行ってしまいます。正さんは夜が明けても、とうとう、とりいにつかまることはできませんでした。

ところが、あとから確かめると、林の中にとりいなどなかったのです。あるのは、きつねの住む穴ばかり。動くとりいは、いたずらきつねのしわざでした。酒によった正さんは、きつねの住む林に入りこみ、いたずらきつねに化かされたのでした。

明治の中ごろまで、このあたりの林では、きつねやたぬきに化かされて帰る道がわからなくなったり、みやげにもらったはずの魚がなくなったり、という話がたくさん聞かれたということです。



（参考にした本：市教育委員会昭和53年発行「東村山の民話」）

ひとだまの話

大正の初めごろ、野口村（今の野口町のあたり）であったといわれる話です。

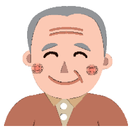
ときどき、夜中にドカンと大きな音をたて、お寺のとびらに何かがぶつかるという話がありました。

村の子どもが「お坊さん、何がぶつかったの？」と聞くと、お坊さんが『ひとだま』だよ。人が死ぬとたましいがぬけ出し、ひとだまが先にお寺にくるんだよ」といいました。

子どもは村のおとなから、ひとだまが青い光をはなって飛ぶ、という話をきいたことがあったので、夜空を見ながらそのようすを想像しました。

そのころは電気がなく、ランプでの生活でした。夜には外はまっ暗です。夜空に流れる明るいものが本当にひとだまだったのか、流れ星だったのか、今となっては誰にもわかりません。

（参考にした本：市教育委員会昭和50年発行「東村山民話集」）



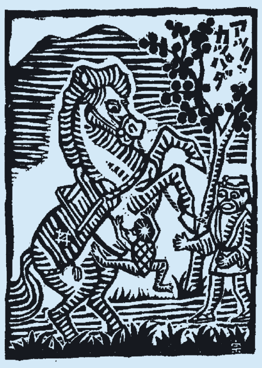
最後の話は、昔の東村山でつかわれていたことばで話してあげよう。

河童のわび状

まず、河童のわび状の話から始めべえか。

南秋津と北秋津の間にある持明院の曼荼羅堂（注1）の下っ側は曼荼羅ケ淵（注2）と呼ばれて、いつのこんから河童が棲みつくようになっていただと。そんで村の者が川で釣なんかしてんと、水ん中から河童が顔を出してニヤニヤ笑っていることなんかあったっちゅう話だわ。

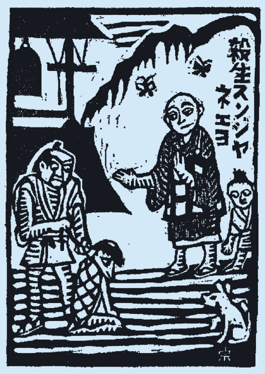
それまでは曼荼羅ケ淵じゃあ夏になんと村の子供たちが泳えでいただけんど、川で泳えでいんと河童に生き胆（注3）を抜かれるってんで誰も泳がなくなっちまっただわ。何でも河童は子供の生き胆を仲間の伊草の袈裟坊（注4）や笹井（注5）の河童のお中元のみやげもんにして、仲間を訪ねてまわっちゃあ水ん中で宴会べえ、やらかしているっちゅうこんで…。



おかげで泳ぎに行く者がいなくなったんで河童連中も生き胆が手に入らなくなっていただと。ある時、久米（注6）の馬子（注7）が一休みすんべえと川岸に馬をつねえでおいたとこが、急に馬が悲鳴を上げただと。びっくらこいて馬を見るっちゅうと変なものが馬の腹にぶらさがってんので気いつけて見るっちゅうと、驚いたことに子供ぐれえのでっかさの河童が馬の腹にしがみついて馬の生き胆をぬき取んべえとしていただと。

馬子はそいつを取っつかめえて持明院へ連れてって坊さんにありがてえ説教をしてもらっただと。そうすんと河童も、「これからあこの土地の人たちに悪さをしねえから、かんにんしてくんない。」と詫証文（注8）を書いたんで、馬子も坊さんも許してやっただと。

その後、河童の言葉どおりいたずらはぴたりとやんで、最初は村の者も安心しただけんど、日が経つにつれて姿を見せなくなった河童たちが何となく懐しく思われてきただと。中にゃ畑仕事を終えると曼荼羅ケ淵までわざわざでかけてって、ボンヤリ水面を眺めてる村の者もいたぐれえだ。詫証文は寺の坊さんが庫裏（注9）の奥に大事にしまっておいたんで、それを見せてもらった人はあんまりいなかったみてえだけんど、そのうち寺が火事で焼けてしまっただわ。火事が起きたのは明治七年ころのこんで、そんときゃあ空が真赤にそまるほどの火の勢いだったそうだけんど、不思議なことに怪我人は誰もでなかっただと。そんであの詫証文も焼け跡の真白な灰の山ん中に消えてしまったちゅうこんだとよ。

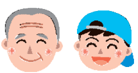


池田宗弘氏（画と文）「東村山の昔話」より

ことばのせつめい

注1 **持明院の曼荼羅堂**　いまの所沢市北秋津にあるお寺のこと
注2 **曼荼羅ケ淵**　いまの久米川町5―37の北、柳瀬川のふち
注3 **生き胆**　生きている動物のかんぞう
注4 **伊草の袈裟坊**　いまの埼玉県川島町にいたというかっぱのなまえ
注5 **笹井**　入間市のちめい
注6 **久米**　所沢市のちめい
注7 **馬子**　馬ににもつをのせ、はこぶ人
注8 **詫証文**　おわびのことばが書いてあるもの
注9 **庫裏**　お坊さんの住んでいるたてもの

※注は市報掲載用につけたものです。



東村山にも方言があったんだね？

そうだよ。かっぱの話の中にも、いろいろあったけど、ほかにもこんなものがあるよ。

東村山の方言いろいろ

あ　あんで＝なんで
い　いかげんぶし＝でたらめ
う　うすだ＝うそ
え　えぞむし＝こがねむし
お　おっぺいす＝おす
さんざっぱら＝長い間
そんだから＝そうだから
でえく＝大工
とんぼぐち＝玄関
のいてくれ＝どいて
ひぼっこ＝ひも
ほっつきあるく＝ふらふらあるく
まだらっこい＝のろのろしている
やっこい＝やわらかい

こんな言いかたは、今でもみんな聞くことがあるんじゃないか？

おもしろいなあ。もっといろいろなことばを調べるにはどうしたらいいの？

ずっと東村山に住んでいる近所の人にきいてみたり、歴史館で調べてみたらどうかな？

問い合せ　ふるさと歴史館　☎396・3800

もっと東村山の昔話を知りたいみんなへ

民話の本を読んでみよう

「かっぱのわび状」がのっている「東村山の昔話」（池田宗弘画と文・白馬書房刊、現在は水声社）は市の図書館で借りられます。

この本には、「きつねのよめいり」などきつねが出てくるお話しや、親切なおにが出てくる「おにのぜんい」など、全部で9つの東村山の昔話がのっています。お話しの内容をあらわした版画も楽しいよ！

○作者の池田宗弘さんは秋津町に仕事場をもち、彫刻家として活躍されています。

手作り紙芝居があるよ

中央図書館には、次の東村山の民話を手づくりで紙芝居にしたものがあります。

「かっぱのわび証文」
「雨ごいの竜」
「かためのへび」

これは、昭和50年に図書館が行なった「ひがしむらやまの民話を紙芝居にする会」で、市民のみなさんにより作られた紙芝居です。

問い合せ　中央図書館